

医療のデジタルヘルス化

常任理事 みずたに 水谷 まさひろ 匡宏

昨今医療現場ではデジタルヘルス（DX）化の促進が叫ばれている。その中で、自民党は最近「デジタルヘルス新成長戦略勉強会」を立ち上げた。その中心人物である事務局長の国光衆議院議員からは、先進国の中でも我が国の医療現場はアナログの世界がいまだに色濃く残っており、医療の質や効率性を向上させるためにも医療DXを推進すべきだと主張している。それと同時に電子カルテの普及や複雑な診療報酬の簡素化にも言及している。グローバルな時代の流れからもその必要性は高い。

岸田政権はへき地対策の柱にデジタル田園都市国家構想を掲げている。高齢者がへき地でも住み続けられるようにDX技術を活用していく必要があるとの認識を示している。

身近な話題ではアップルウォッチの登場であろう。何と指先一本で時計のデジタルクラウン（リュウズ）を30秒間タッチし続けると文字盤にその人の心電図波形がリアルタイムに表示されるという優れものである。たとえば訪問診療の患者さんの中にアップルウォッチをはめている方がいて、毎回気楽に時計を操作しては私の診断を仰ぐのである。一言でいえばアップル老人の誕生である。

この所謂ウェアラブル製品やスポーツアプリなどのDX製品については市場規模の拡大が急速なため、その質の担保が十分ではなく玉石混淆の状態にある。今後IT装置の質の見える化に真剣に取り組んでいかなければ健全なマーケットにはつながらないことであろう。

なお私のクリニックでは今秋から遅ればせながら電子カルテの導入とオンライン資格確認の導入と同時にオンライン診療を開始する予定である。

十勝の私鉄

理事 いなば 稲葉 しゅういち 秀一

北海道医師会の理事会を含め、札幌で開催される会議・講演会等に出かける時には、赤字線区の収支改善に貢献すべくJRを常に利用していました。しかし、ここ2年半に及ぶコロナ禍でWeb会議が中心となり、JRを利用することは殆ど無くなっています。私が利用する石勝・根室線は、JR北海道の都市間輸送を担う主な路線の一つですが、先日の発表によると今年4～6月期の収支でも相変わらず赤字が続いているとのこと。そのうち、維持困難路線の一つになるのではと危惧しています。

さてここ十勝には過去3つの私鉄が営業していました。十勝鉄道、河西鉄道そして北海道拓殖鉄道です。十勝鉄道と河西鉄道は、甜菜製糖会社が栽培地から工場へ甜菜を輸送する目的で敷設された専用鉄道が始まりです。一方、北海道拓殖鉄道は、道内の有力商工業者等が資本を出し合い、地方開発を目的として設立した私鉄です。

現在の帯広市の畑作地帯を主な営業路線としていた十勝鉄道は、大正13年2月に開業しています。収穫した甜菜を各農家が畑から荷馬車で駅まで運び、そこから工場まで運ぶ貨物専用鉄道でしたが、山間・畑作住民の利便性を考え一般荷物・旅客運輸も始まりました。地域住民の足としての役割も担い最盛期には営業キロ65.5kmに延びています。沿線には帯広農業高校と帯広畜産大学もあり、通学にも活用されています。しかし、国の地方鉄道補助法廃止等で補助が打ち切られると経営は悪化、山間部の人口も離農による過疎化が進み、利用者が減少したことも重なり赤字は雪ダルマ式に増えていきました。一方では交通革命でトラック輸送と自家用車が台頭し、結局昭和34年11月廃線となりました。

この廃線に至る経緯はJR北海道が抱える課題の縮図でもあります。はじめに廃線ありきではなく、存続する視点に立つてのプロセスを考えてみてはと、鉄道ファンの一人として望みます。

